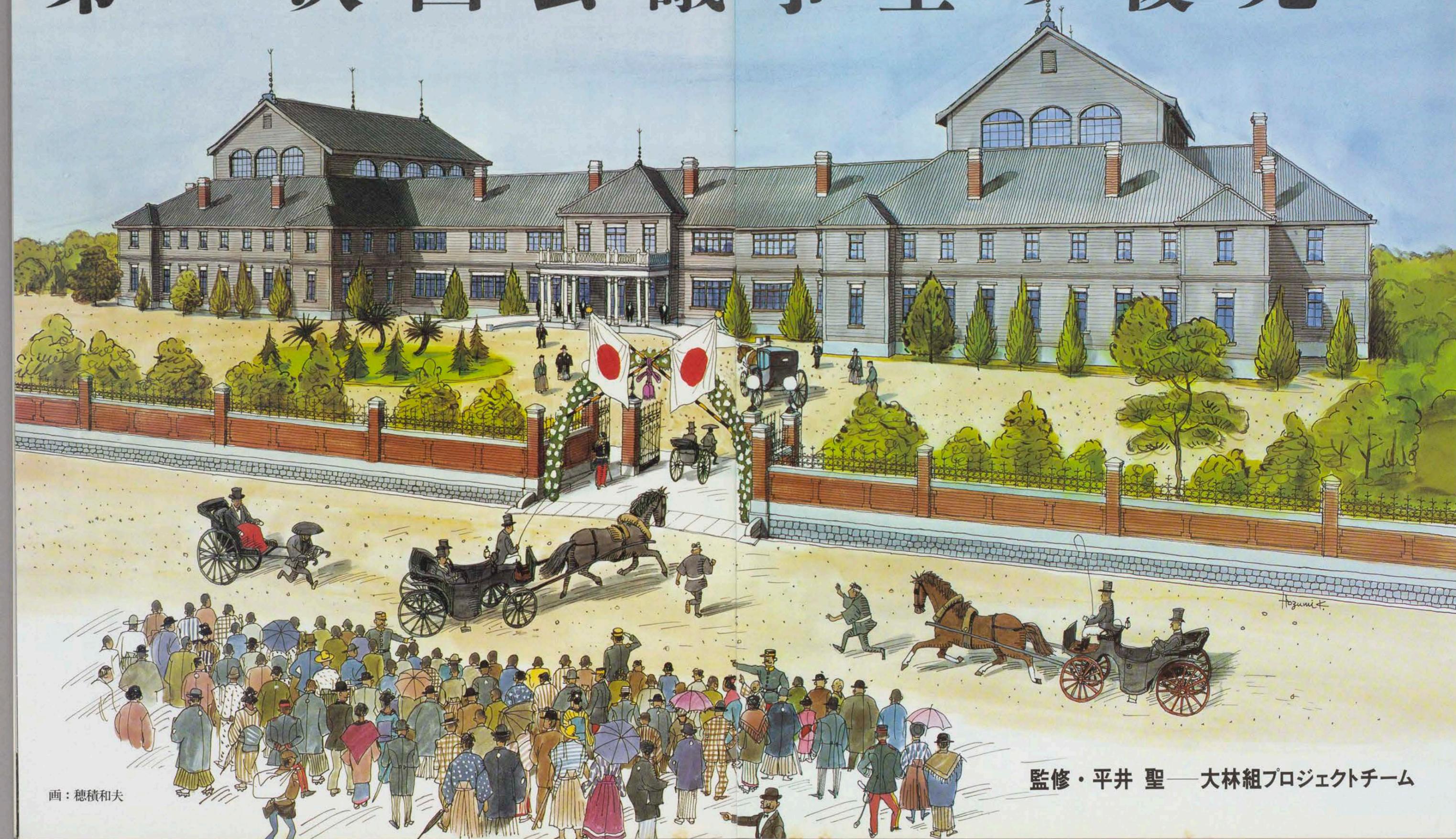


第一次国会議事堂の復元



画：穂積和夫

監修・平井 聖 — 大林組プロジェクトチーム

わが国における議会政治のシンボルである国会議事堂。現在の議事堂は昭和十一年に建設されたが、その先駆となった最初の議事堂（第一次帝国議会仮議事堂）は、文明開花の雄音高い明治期、自由民権運動の高揚を背景として誕生した。明治元年に発せられた五箇条の御誓文における、「広く会議を興し万機公論に決すべし」の具体化ともいえるこの議事堂は、どのような姿をしていたのであろうか。折りしも一九八五年十二月は、内閣制度発足百年、国会開設九五周年にあたる。そこで今回、大林組プロジェクトチームは、東京工業大学教授・平井聖氏の監修により、わが国近代建築の揺籃期に建設された第一次国会議事堂の復元に挑戦した。

一、第一次議事堂建設の沿革

明治維新を契機として、あらゆる分野に近代化の道を模索していた新政府が、ついに国会開設の決議を下したのは明治十四年十月のことであった。時の政府は、三条実美を太政大臣とし、伊藤博文、山県有朋、西郷従道などを参議とした体制であった。この決議は、西南の役の後、急速に盛り上がりを見せた自由民権派の民選議院設立運動に対する回答であり、また、新政府がわが国に初の立憲議会制を確立する決意を示したものである。その時に発せられた詔書によって、「十年後（明治二十三年）の国会開設」が約束された。これを受けて、民間では板垣退助の自由党、大隈重信の立憲改進黨などが次々に組織され、国会開設への期待は大きくふくらんだ。一方、新政府も海外の先進諸国に学びながら、政治体制の変革に努めた。明治十八年には、それまでの太政官制度に代わり、内閣制度を発足させ、初代の内閣総理大臣に伊藤博文が就任した。さらに、立憲政治の根幹となる憲法の起草が進められ、明治二十二年には大日本帝国憲法が公布された。

こうした大きな時代の波の中で、近代化を急ぐ日本は、先進諸国に負けぬ議会活動の場を建設する必要に迫られた。つまり、帝国議会議事堂の建設である。その準備のために、明治十九年二月、内閣に外務大臣井上馨を総裁とする臨時建築局が設けられた。そして現在の国会議事堂がある永田町界隈に、議事堂を中心に諸官庁を集約的に建設する一大計画が立案されたのである。当時の政府は、西洋化による近代化を図っていた。また、不平等条約の改正をめざし、諸外国と友好関係を保つための鹿鳴館外交を展開していた。そうした外交政策を受け、わが国最初の議事堂は、ドイツから建築家を招き、その指導のもとに煉瓦造の本格建築が行われることに決まったのである。

いえよう。

それだけに、わが国最初の議事堂でありながら、その姿は現在にほとんど知られていない。そこで、われわれプロジェクトチームはわずかに残された資料をもとに、コンピュータによる最新の解析技術を駆使して、その復元に挑戦した。

二、第一次帝国議会仮議事堂の復元

◆復元作業の前提

第一次仮議事堂の復元に際し、まず憲政記念館、日本建築学会、国会図書館などの諸機関に当たり、当時の資料の収集を行った。文献資料は決して多くはないが、そのいくつかには当時を窺い知るための数値の記載があった。たとえば『議会制度七十年史』（衆議院・参議院編発行）によると、第一次仮議事堂の規模は次のようになっている。

- 位 置……麹町区内幸町二丁目
 - 敷地坪数……七、六二坪三合一勺
 - 建物坪数……二、五六一坪（付属建物を含む）
 - 構造……木造洋風二階建
 - 工 費……二、三万三、八八八円七九銭五厘
- ちなみに、現在の国会議事堂は、敷地面積が約二、九三六坪、建坪（本館）は三、七五〇坪である。

次に、文献のいくつかに、平面図が掲載されているものもあった。これらの平面図から、第一次仮議事堂は、正面を東南方向に向け、八角型二層の中央部を有し、向かって右に貴族院、左に衆議院が配置されていたことが分かった。

しかし、これらの平面図を詳細に比較すると、いずれも部分的にはあるが顕著な違いが見られ、どの平面図が正確なものであるか判断に迷った。当時の臨時建築局は、ベックマンやエンデに対する工事発注に当たり、予算不足を訴えている。また、議事堂建設当時の新聞をみると、当初は十三万円程度であった建設予算が、設計段階や工事中に次第に増え、最終的には『議会制度七十年史』にも見られる金額に至った経緯が想像される。これらから推察すると、おそらく議事堂建設中に幾度かの変更があったことも考えられた。そこでさらに信頼できる平面図を捜したところ、東京工業大学の平井聖教授のご指摘により、明治二十三年四月発行の『建築雑誌』第二十九号（日本建築学会発行）に掲載された縮尺「二百分の一の平面図」と出会うことができた。これ

始めに来日したウイヘルヘルム・ベックマンは、当初の議事堂建設予定地であった日比谷の練兵場跡地を調査し、地盤の悪さから建設地を変更した。事実、その地は、日本の建築家からも地盤の悪さを指摘されていた場所だったのである。ところが、ベックマンと交代して来日したヘルマン・エンデは、最初の子定地に執着して試掘を繰り返し、莫大な浪費を重ねた。しかも、エンデが帰国後に送ってきた議事堂設計図は、奇妙な和洋折衷案で、日本の建築家の多くが首をひねる結果となった。

その上、財政の逼迫と、時間的な制約も重なり、ついに当初の子定が大幅に変更されるに至った。まず、建設地は麹町区内幸町二丁目（現在の通産省があるブロック）となった。さらに、本建築は中止されて洋風木造建築となり、その設計をドイツ人技師アドルフ・ステヒミユレルと臨時建築局技師の吉井茂則が担当した。これは、いずれ本建築の議事堂を建てる含みを持たせたものであった。こうしてわが国最初の議事堂は、明治二十三年の国会開設に間に合わせるべく、第一次仮議事堂という名称で建設されることになったのである。

この仮議事堂は、明治二十一年六月に起工し、二年半の歳月をかけて二十三年十一月に竣工した。そして竣工まもない十一月二十九日、ここにおいて記念すべき第一回帝国議会の開院式が行われ、わが国の議会政治が発足したのである。当時の新聞によれば、開院式当日は明治天皇の行幸があり、大礼服に勲章を付けた貴族院議員は馬車で、通常礼服の衆議院議員は人力車で、議事堂正門前に次々と乗り着いた様子が伝えられている。

しかし、この第一次仮議事堂は短命であった。開院式が行われてからわずか二カ月後、議会がまた開会中だった明治二十四年一月二十日未明、突然の出火によりまたたく間に焼失してしまったのである。まさに、幻の議事堂といえる。は、昭和十三年発行の『帝国議会議事堂建築報告書』に掲載された図面とも一致しており、建物平面の数値などに関しては、これに準拠することにした。さらに幸運であったのは、建築学会に、第一次仮議事堂の外観正面写真がたった一葉だけ残っていたことであった。この写真は、いくつかの文献にも転写掲載されていたが、その乾板が建築学会にあったのである。われわれは、この二つの資料を復元の基礎とし、さらに前出の報告書にある内観写真（衆議院、貴族院、傍聴席など）、当時の錦絵（大日本帝国議会開院式場之図、憲法顕彰会絵巻帳、帝国衆議院会議之図など）、議員宿所写真、そして平井教授より提供していただいた衆議院・貴族院内観版画コピーなどを参考として、今回の作業を進めた。

◆復元作業

今回の復元の主眼は、一枚の平面図と立面の姿を唯一窺える写真から、外観内観それぞれの立面図を作成し、往時の議事堂の姿を建築的に浮かび上がらせることにある。特にポイントとなるのは、写真からの図面作成である。基礎資料のうち、平面図の精度には信頼がおけるが、写真は一見、建物の姿を正確に伝えているようであるが、建築的にみると決してそうではない。たとえば、視点がどこにあるのか、つまり、どの位置（距離、高さ、角度など）から撮影されたかによって、写真上の建物にはそれに該当する立体的な角度が生じている。また、明治期の写真であるため、解像度は低く細部には不明な点が多くある。これらをどう克服するかが、今回の作業のひとつのテーマであった。

まず、写真から図面をおこすには、いわゆる透視図を作成する時の逆の作業を行う必要がある。写真を透視図に見たて、そこから消点と視点（人間の目の位置）とを求めて、平面図と立面図に直していくのである。今回の場合、平面図はあるので、それを根拠に立面図をおこしていくこととした。

復元作業は、次のような順序で行った。

- ①最初に、建築学会より入手した外観正面写真の外郭線をなぞり、パスを作成して、消点を求めた。
- ②仮定画面（透視図の倍率を求めめるために基準とする画面）の上での平面寸法と、入手した平面図上の寸法を比較して、倍率を求めた。
- ③その倍率に従って調整した平面図とパスから、作図的に視点を求め、同じ倍率から各部分の高さを算出して立面図を作成した。以上の作図はすべて手描きである。
- ④ここまでの作業で得た視点では、作図上の誤差が想定される。つまり、平



明治17年測量地図（参謀本部陸軍部測量局発行）

面図と立面図をもとに逆にパースを作成し、そのパースと外観写真を重ね合わせる。多少ずれた部分が生じる。その修正のためには、試行錯誤的に視点の位置を微調整して、もつともずれの少ないパースによって視点を最終決定する必要がある。この作業を人間の手で行うと、膨大な時間を要する。

⑤そこで今回は、当社開発によるコンピュータの最新設計システムを用いて、四十以上の視点から最も合致するパースを選び出して最終的な視点を決定した。

コンピュータによる解析の結果、外観写真は、議事堂正面中央に向かって右六分、建物からの距離八七・五分、さらに地上六分の高さから、レンズを水平にかまえて建物正面に直角方向に撮影したものであることが判明した。これは現在の場所であれば、イノホールなどがある飯野ビルの三階付近に該当する。

⑥コンピュータで修正した視点をもとに、議事堂各部のより正確な寸法を求め、再びコンピュータによって立面図を修正してアウトプットした。

⑦こうして出来上がった立面図に、手描きで正面手すりや車寄せなどの外部装飾を加え、さらに線の太さなどの調整を行った。装飾に関しては、写真か

らは判別できない部分が多いので、ウィルヘルム・ベックマンの他の作品例や、当時の作風を参考にして描写した。また、同様に写真から判別できない外壁については、錦絵などを参考に、当時多く使われたドイツ下見板張りとして想定した。

⑧最後に、手作業で加筆した立面図を再びインプットし、最終立面図をコンピュータで作図した。

なお、平面図の左右両端（貴族院、衆議院の外側）には、スパン約三・五間て書記室、議長室などの付属屋が見られる。この部分については、外観写真ではわずかに屋根の一部が見えているに過ぎない上、近隣家屋の屋根が重なっていると思われる、正確な屋根形状が判別しにくい。そこで、撮影された棟線の折れ方だけを根拠に、数種類の屋根伏を想定し、当時の屋根の納まりから検討を加えた。そして最終的には、湯島の岩崎邸などにも用いられた陸屋根を一部分に採用した。

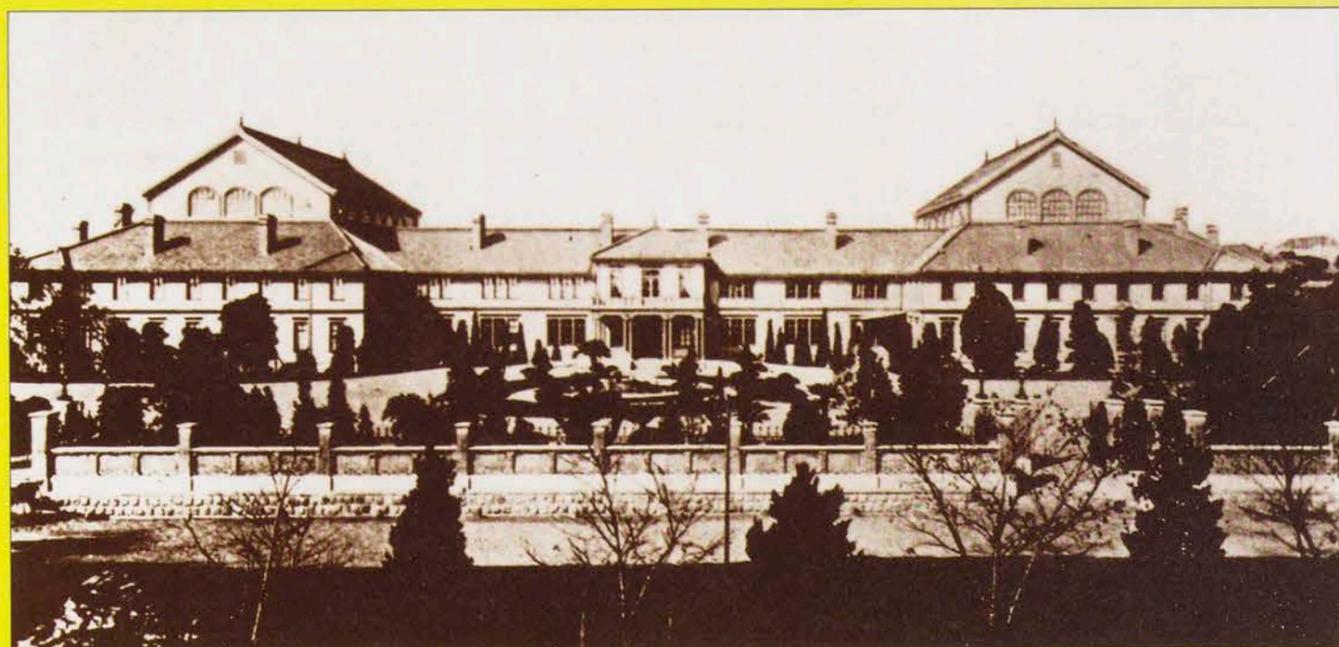
以上が外観についての作業である。

内観については、貴族院、衆議院の両議場の復元を行った。両議場を比較すると、貴族院の議壇奥に玉座があるほかは、基本的にはどちらも同じである。従ってここでは、衆議院議場の内観写真をもとにし、貴族院議場と貴族院傍聴席の内観写真、両議院内観版画などを参考にして作業を進めた。

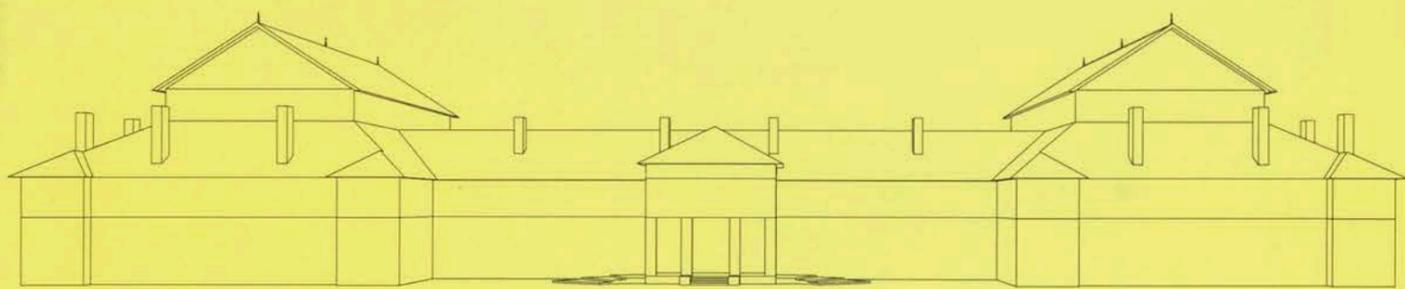
復元の過程は、外観の場合と同様だが、最初の段階で一点透視と思われたものが、コンピュータの解析によって二点透視であることが判明し、その時点で大幅な修正を行った。この結果、内観写真は、議壇中央より右〇・四分、議壇前面より距離一六・二三分、そして一階床面より五・〇一分の高さのところから、レンズを水平にかまえて、正面中央より〇・二五分左のところに向けて撮影したと思われる。この撮影位置を建物の中で推察すると、二階傍聴席前列に合致した。

こうして、わが国に誕生した最初の議事堂は、百年の眠りから覚め、往時の姿を現した。それは、現在の国会議事堂とは比較にならない木造一階建ての建築ではあるが、ここにおいて日本で初めての立憲議会が開催されたことを考えると、それを待ちのぞいた人々の息吹すら感じられる。「全国民待望の国会は開かれた」という当時の新聞の見出しに、人々がこの議事堂の完成をどう受けとめたかが偲ばれる。

建築的には、この仮議事堂は洋風であるが、エンデの案が採用されず、日独の技師の協力案となったこと、その完成からわずか二カ月で焼失したという数奇な運命を担った議事堂だけに、日本の近代建築史上でもきわめて興味深い建築物であるといえるだろう。

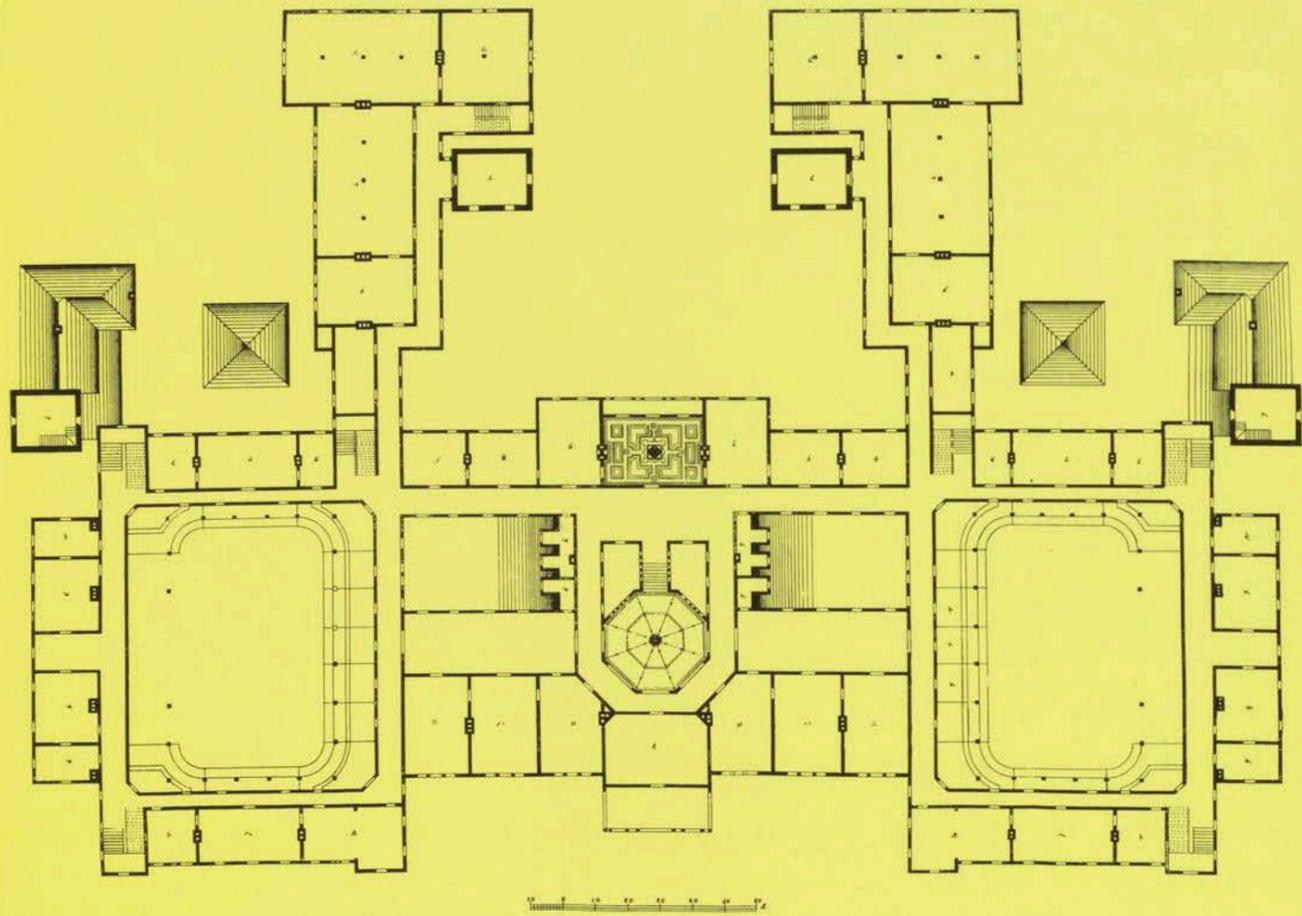


第一次帝国議会仮議事堂／写真：日本建築学会



写真(右ページ)の撮影角度をコンピュータで求めたパース

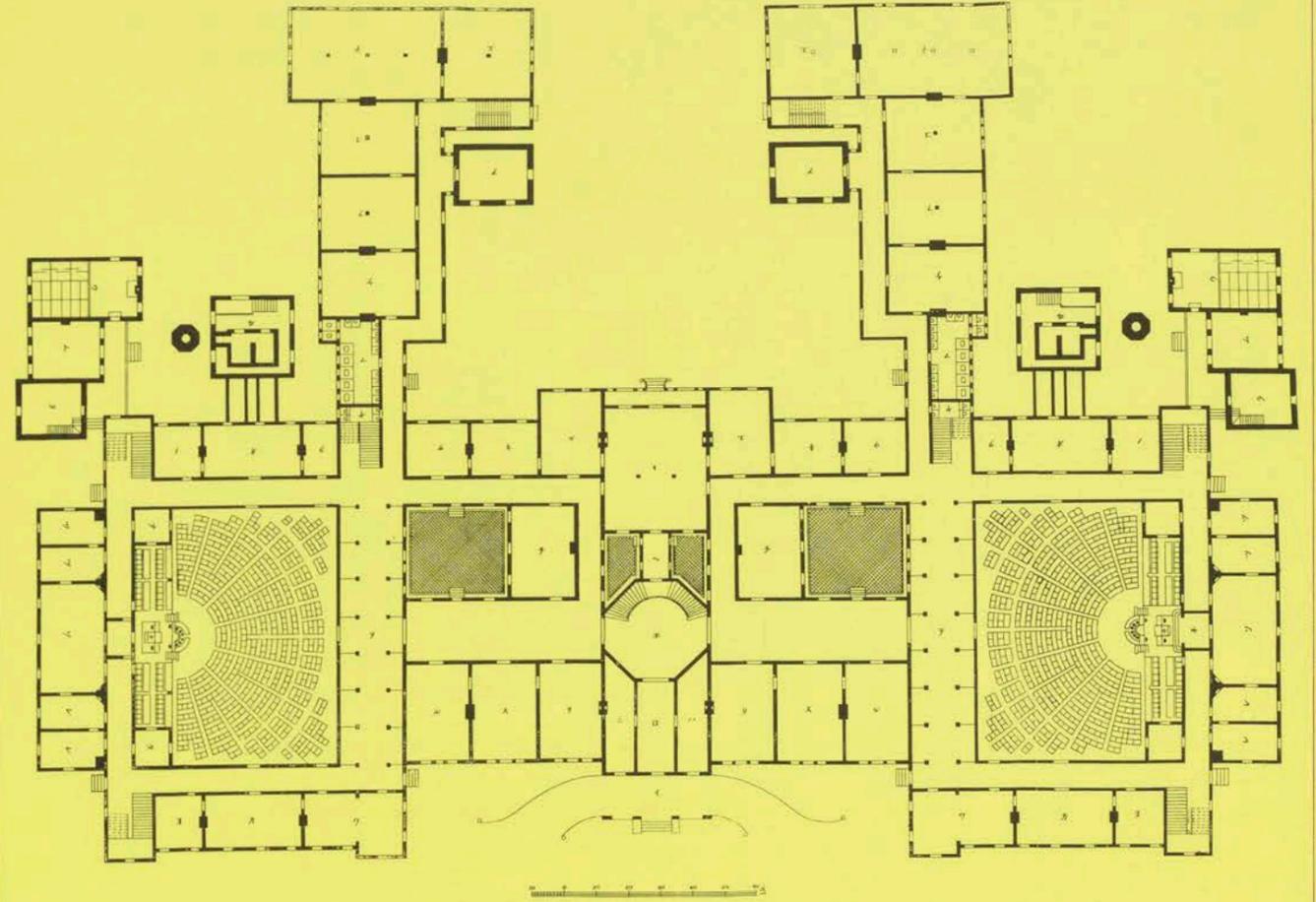
第一次帝国議会仮議事堂 2階平面図



- フ ケ マ ヤ ク オ ノ 井 ウ ム ラ ナ 子 ツ ソ レ タ ヨ カ ワ ル ヌ リ チ ト ヘ ホ ニ ハ ロ イ
- 書庫 外国公使席 皇居宮御座所 皇族席 皇族便所 給仕室 大臣室 大臣室 供養ノ間 便殿 供御ノ間 大臣室 談話室 同前 議事事務各課室 第八局 書記官室 給仕室 特別委員室 同前 委員室 特別委員室 同前 同前 特別委員室 第五局 第六局 第七局 談話室

「建築雑誌」第39号（日本建築学会提供）より

第一次帝国議会仮議事堂 1階平面図



院議衆

院族貴

- ユ キ サ ア テ エ コ フ ケ マ ヤ ク オ ノ 井 ウ ム ラ ナ 子 ツ ソ レ タ ヨ カ ワ ル ヌ リ チ ト ヘ ホ ニ ハ ロ イ
- 同前 常任委員室 常任委員室 書庫 議事事務各課室 同前 同前 常任委員執務室 常任委員執務室 議院警察 議員便所 大臣便所 給仕室 常任委員室 面謁所 暖房汽鐘室 小便器室 湯呑所 書庫 会議中出入口 王座 議院ハ 書記室 議長室 書記者室 會議中出入口 面謁所 同前 常任委員室 第一局全上 第二局 第三局全上 第四局 協議室 給仕室 八角形階段ノ間 受付 議院警察出張所 玄関 車寄 代官事務所

第一次帝国議会仮議事堂立面図

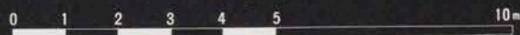
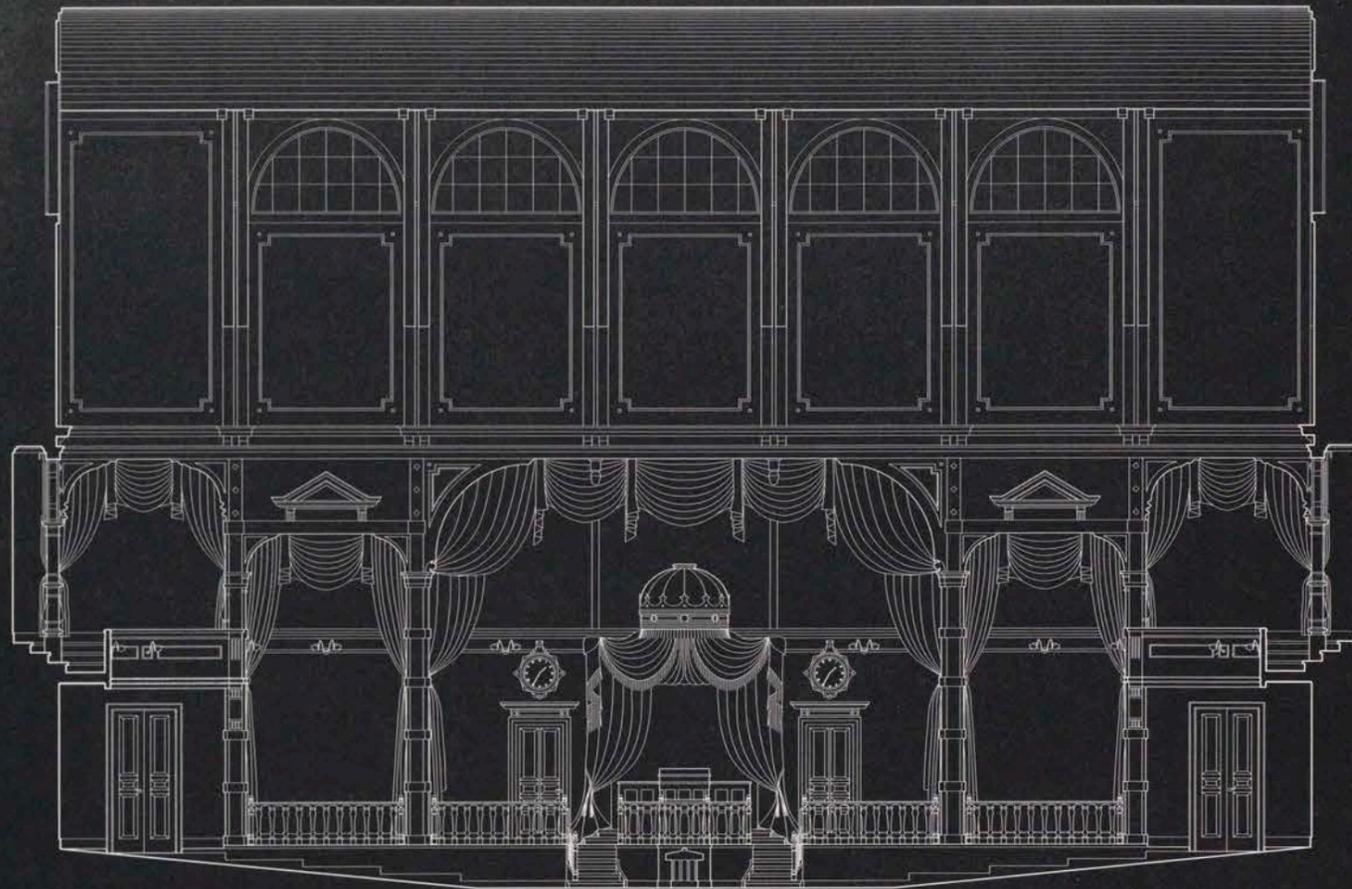


0 1 2 3 4 5 10 20m

衆議院本会議場正面展開図



貴族院本会議場正面展開図



作業を終えて

わずか二カ月でその生涯を閉じた第一次仮議事堂の復元にあたって、懸念されたことは、その短命ゆえの資料の少なさであった。作業を進めるに従って、この危惧は現実のものとな

なってきた。建設が始まった明治二十一年頃の新聞記事の断片、憲政関係の資料の建築に関する記述や挿絵の拾い出しなどの作業に、当初は明け暮れた。また外観写真を発見し喜んでみれば、実は第一次仮議事堂のものであったり、それぞれの記述に違いがみられたりと、資料の確定には予想を超える時間を要した。しかし、資料が曖昧であれば、それだけ推理・臆測の楽しさも増える。

復元への第一歩は、憲政記念館の方々の温かいご協力で始まった。両議場内部の写真、外観の錦絵など、われわれの資料はここで倍に膨れあがった。さらに復元への足どりを確かなものとしたのは、東京工業大学・平井聖教授のご指導と、建築学会のご好意により平面図と外観写真を得られたことであった。外観、内観の輪郭はすべてこれらの資料からなぞり出された。

輪郭が浮かびあがったところで、装飾や仕上げを加える段階に入った。ここは、あまり正確とは思えない当時の記事や錦絵、また同時代の建築様式をもとに、想像をたくましくする「建築的な」作業となった。

テーマに取り組み始めた六月から、作業を終えた十月まで、作業内容に濃淡のばらつきこそあれ、五カ月を費やした。この月日をふりかえる時、わずか二カ月という第一次仮議事堂の寿命はかなさが、実感をもって迫ってくる。この復元によって、たとえ誌上とはいえ、第一次仮議事堂に再び生命を与えることができたのではないかと喜んでいる。